

# 景徐周麟と「水」について

\*武穎（名古屋大学・人文学研究科）

## 1. はじめに

景徐周麟（1440－1518）、近江（滋賀県）生まれ。父は武将大館持房、母は赤松則友の娘、道号は景徐、諱は周麟、号は半隱、宜竹、対松など。5歳にして京都の相国寺に入寺、夢窓派の法を嗣ぐ。応仁・文明の乱（1467-1477）により、近江国の永源寺に身を寄せ、長命寺をも訪れた。

文明18年（1486）から景德寺、相国寺住職、相国寺鹿苑院塔主と僧録、等持寺住職などを歴任した。五山文学後期の代表的作家である。その作品集である『翰林葫蘆集』には詩、字説、道号などをはじめとする各種の漢詩文が収録されている。

## 2. 永源寺と長命寺、琵琶湖

応仁の乱により、当時京都にいる禅僧らの多くは地方に下向した。内乱の長期化を予想し、琵琶湖を中心とした近江国が京に近く、情報を得やすいため、最もよい避難の地として選ばれた。よって一時的、京洛の文教中心が永源寺に移ったという。応仁・文明の乱についても、当時禅僧らの作品によく見られ、景徐周麟の作品からも、「抑丁亥歳、京師喋血、諸将左袒右祖、未決勝敗矣」など当時戦況の描写などが見られる。

一方、「天下文明一統春、日重光又月重輪、普賢歳旦来相賀、龍種尊王居玉宸」や「山割結庵地、国存拜将壇」（『湯山連句抄』）など乱後の天下太平、国家安穩、禅林復興などを主題とされる作品も多い。また、長命寺について、その文「湖隱軒詩并序」には、琵琶湖の話を取り上げている。「永正丁卯之秋、予避京師之亂、寄跡於琵琶湖畔、水之激灑、山之濛濛、爲予之識面耳、」永正丁卯は永正四年（1508）を指し、その年に景徐周麟は長命寺（現在の滋賀県近江八幡市）に身を寄せ、当寺の高所で琵琶湖を眺めたという。また、「琵琶湖」の言い方も景徐周麟が最初に指摘したという。

## 3. 瀟湘八景と湖上八景

五山禅林において、中国の瀟湘八景図を詠じる作品群があり、瀟湘八景も五山文学の一大主題とされている。景徐周麟の作品にも、この種の作が多く、変容も見られる。詩題には、「瀟湘夜雨」、「江天暮雪」、「山市晴嵐」、「遠寺晚鐘」、「漁村夕照」、「遠浦帰帆」、「平沙落雁」、「洞庭秋月」などがあり、これらの図画を見ながら詠じた詩には、独自の展開が見られる。一方、長命寺と琵琶湖が詠出する「湖上八景」詩「瀟湘八幅按其圖、長命寺前天下無、一景新添有聲畫、袖中携去琵琶湖」が注目すべきである。

## 4. 「水」への情趣と態度

景徐周麟は清潔で純粋な象徴である水を愛し、その詩や文の作品にも多く取り上げている。「清仲字説」では「... 故水在澄其源、人在静其心、水不澄則魚龍變怪、獰颯覆船、欲求一壺之救、不可得矣、心不静則燥慾競起、塵務塞前、欲求一隙之明、亦不可得矣、上世之人、稟性純清、而自然不沈酣於利禄聲色... 噫水必至於海、而會其極者也、淳也清其心、而不容私欲於其間、循其性之所順、而至於道之極...」と述べ、求道の「心」を「水」に譬え、禅の純清な「大光明心」を持ってこそ、「道之極」に達するのであると主張している。

前掲作品「湖隱軒詩并序」においては、「有客訪予於寓欄之下、觀之毅然無髮丈夫也、問其姓名、則其姓平、其氏板坂、聞人也、予昨見其父、得無嵒氏之嘆也、法名宗徳、號曰大歇、就予需軒名、以湖隱命焉、公欣然領之」と、軒名を求めに来る平氏に「湖隱軒」と軒に名付けてあげ、「因告之曰、昔有風流和尚曰濟禪師、喜咲怒罵、以成佛事、江湖稱之曰、湖隱濟顛、公爲人、挺出於物表、而不爲禮俗所拘束、誠在家杜多也、旁以醫術鳴于世、爲士大夫發藥、皆得其愈、以故無貴無賤、競候其門、然而多謝之、此乃隱者之高致也」と、中国古代杭州西湖の湖畔の靈隠寺に身を置かれた濟顛の故事を引用し、「湖隱」という趣旨を唱える。

この故事のほか、北宋時代の林和靖が西湖に隠逸した故事も五山禅林では広く受容し、変容されている。特に景徐周麟の手による引用が多く、景徐周麟の作品から見ても、「江湖」、「湖隱」などが頻出し、「湖」や「水」との関連作品からも、その隠逸の態度と思想を読み取れる。

## 5. おわりに

景徐周麟は近江国の出身で、京洛の五山禅林における当時の高僧である。応仁・文明の乱、さらに永正年間には反乱を避け、近江国にある愛知川沿いの永源寺や琵琶湖畔の長命寺に身を寄せていた。これらの経験も彼の作品に多く生かされている。また、景徐周麟の作品を通覧すると、「水」関連の言葉が頻出し、これらの作品を考察すると、道心の保持、悟道のヒントと発想、隠逸思想などが見られ、「水」によっても、その豊かが精神世界を窺うことができる。

\*本論文における景徐周麟の詩文は上村観光編、景徐周麟『翰林葫蘆集』（『五山文学全集』、思文閣、一九九二年）による。